

子どもと家族と学校と ⑱

『極端に誤った認識をする子ども』

CON(こん)カウンセリングオフィス中島

中島弘美

体験をしたことのない衝撃を受けると、えっ、そんな受けとめ方をするの!!! 子どもの反応を目の当たりにして考えさせられることがある。

親や周りにいる大人、教員など、子どもに関わる人はそのことを知っておく必要があると考えている。

就学前の子ども

小さい子どもといっしょにご飯を食べたり、遊んだり、おしゃべりをしていると、なにげなく口にした言葉にほろっと心動かされることがある。

ホ～ホケキョ～とさえずりを耳にし、それをたよりにうぐいすの姿を見つける。

「おうちにも春が来たね」

なんてかわいいことを口にするのだろう、それにしても春ってどうやって知ったのかなと感心している矢先に、地面にいる虫をつぎつぎに石でつぶしている。荒っぽい行動も平気だ。

毎日の生活のなかで、こんなふうになまざまな体験をして子どもは育っていく。

生活環境の変化

突然、平穏な生活の環境が大きく変化する。

最近は自然災害による影響もたびたびで、急な引っ越し、家族の病気や事故、そして死別など、子どもとは直接関係なく、親や大人の事情により、それまでと異なる生活を余儀なくされる。

たとえば、父と母の離婚もそのひとつ。

これまでの住まいを離れて、母と子どもが母方の実家で生活することになった。うれしい移動とはならない。

近隣の人や友だちとの別れ、毎日遊んでいた公園、スーパー、習いごと、見慣れた景色をあとにして、新しい場所へ移る。

親しい人も少なく、あまり知らない場所、まだ友だちもいない、悲しい気持ちの切り替えは簡単ではない。

そのような状況の変化を子どもは、どう受け止めるのだろうか。

こんなことになったのは!

こんなことになったのは、お父さんが悪い！離婚するなんて、ひどい！いったうちの親はふたりとも何をしているのだ！わけがわからない、もう知らない！

そのように親に向かって攻撃的なことばが飛び出る。

あるいは、ただ不機嫌になる。周囲にあたり散らす。乱暴な行動に出ることもあるだろう。これは男の子にみられる傾向。

お父さんとお母さんを何とか仲直りさせる！と力む子どももいる。自分が仲介すればなんとか元通りになると信じ切っているし、そうしなければならぬと考えている。

内にエネルギーが向く子もいる。

お母さんはイライラしているから、いろいろとたずねちゃいけないみたいだ。心配かけないようにしよう、おとなしくしておこうと自分に一生懸命にいきかせる。悲しんでいるにもかかわらず、感情をおさえて平気を装う子ども。じつと様子をうかがって、気遣いをする女の子に多い傾向。

年齢もよるが、さまざまな反応を子どもたちはあらわす。

わたしが悪いからこうなった

どこからそんな考えが出てきたのか、全く関係ないとらえ方をする子どもがいる。

親の離婚は、私がいい子にしていなかったから、自分のせいで悲しい出来事が起きたと関係づけてものごとをうけとめる。

僕がおばあちゃんをもっと大切にしていたら長生きしたのに、こんなにも早く死んでしまった。ぼくのせいだ。僕が良い成績をとっていたらおばあちゃんは喜んで元気になっていたはずなのに、僕が悪いのだと考えてしまう。

お母さんがガンになったのは、私がお母さんのいうことをちゃんと聞いていなかったから心配をかけてしまった、だからお母さんが病気になったのだ。

子どもがせいっぱい考えて出したこたえが、私が悪いという結論。

大人や親は子どもが胸の内ですんなことを考えていることを想像すらしないので、驚き、啞然とする場合もあるだろう。

大人は離婚手続き、葬儀の準備、手術入院の対応、生活の維持など、対処すべき事柄が多く、子どもの心情を正確に把握するゆとりは少ない。

難しいことだが、そんなときほど、子どもの気持ちに関心を向ける必要があると考えている。

大人が修正する

お母さんと父さんが別に暮らすことになったのは、話し合いをしてそうすることになったの。それがみんなにとって一番良いと思ったからね。あなたとは全く関係ないよ。これから別々に暮らすけれど、これまでと同じようにお母さんもお父さんもあなたのことを大切に思っている気持ちはかわらないよと説明をすること。

環境の変化をとまなうできことがあるときには、子どもにわかりやすいことば

で簡潔に伝える。子どもは親の離婚に関係ないから問題外と、蚊帳のそとに子どもをほおりださないこと、反対に、さまざまな事情について過度に子どもを巻きこまないこと。夫婦の争いは子どものこととは別なので、大人世代の話に子どもが首をつっこまないようにする配慮もあるだろう。

日頃から、子どもの考えていることはだいたいわかるような気がして生活しているが、いままさにどのようなことがおこっているのかの事実をことばで簡潔に伝えることが大切となる。

お母さんもどこかに行ったりしない？

離婚により、もう一人の親が子どものもとを去って別のところで生活することになった。すると子どもは、いま一緒に暮らしている親もいつかどこかに行ってしまうのではないかとあり得ないようなことも考える。

今後の生活のようすがわからないとき、不安や疑問でいっぱいになり、勢いをつけてモヤモヤが膨らんでゆく。

そして、子どもは悲しい思いをすると、もうこれから楽しいことはやってこないのだと考えることもある。極端に誤った認識は小さなうちに修正をし、ひろがらないようにする。

お母さんはどこかに行ったりしないよ、ずっといっしょにいるよと、直接子どもにことばを届けるだけで、モヤモヤは少しずつ小さくなっていく。

黙っている子 イライラしている子

子どもが考えていることを口に出すと、その場その場の感情の揺れがわかるので、親や大人は修正することができる。しかし、自分の気持ちをおさえこんで、モヤモヤだけが暴走すると、子どもが何を感じているのかわかめなくなり、知らないあいだに距離が生まれてくる。

子どもは、表情がなくなったり、おとなしくなったり、反対に乱暴な行動がくりかえされたりして、余分に親から叱られることになる。いつもと様子が違うことに気が付いていても忙しくて対応できないつらさがある。

子どもにふりかかる大きな環境の変化があるとき、心配なこと不安なことはなんでもたずねていいよと念を押し、具体的にこれからどうなるのかを説明をする。

子どもの適応力は、すばらしいものがあり一定の時期を過ぎると、飛躍的に伸びる。もちろん、ゆっくり慣れていくスロースターターの子もいる。

過剰な不安を抱く必要はないが、特に変化のかわり目のころは、大人も子どもと手探り状態なので、お互いにいろいろなことばを交わして、トンネルから少しずつ脱出していきたい。

中学生も誤った認識

2014年夏の土砂災害で大切な友だちを亡くした子どもが、

「心臓移植をしても生き返らないの？」と語った話に心が痛む。

友だちを救ってもらいたい気持ち、元に戻らないことを認めたくない気持ち、どうしようもない悲しい気持ちからこんなことばになったのだろう。

平成17年長崎県の小学4年生、6年生、中学2年生の児童生徒対象にした「生と死」に関するアンケートに注目する。

84.6%が死んだ人は生き返らないと思っている一方、生き返ると思っている児童生徒も15.4%いると結果を発表している。

予想外なのは、学年別では中学校2年生が18.5%と最も高くなっていったこと。

中学生になったらわかって当然、と大人が思っている、死を理解してないのだとある意味ショックを受ける。

人の死をなかなか実感できないのかもしれない。

子どもたちが、わかるまで、気がつくまで成長を待つことはもちろん大切で、カウンセリングをしていると見守る重要性をつねづね説いている。

ただ誤った認識については、こうだと伝えることも同じく重要。

そして、なによりも事実を受け止める、そのプロセスにつきあえるような関係でいたいと考えている。そのためにも、日頃から、子どもの話を聴ける大人でありたいと思う。

「耳」^へに「十四」の「心」

子どもが、何か話したそうにしているとき

「はい、なに？どうしたの？」

と、聴くことができるのが理想だ。

耳^へに十四の心と書いて「聴」の文字が浮かんできた。

子どもが抱えている不安を話し、大人はその気持ちを受けとめ、適切なことを伝える、そのようなやりとりが求められている。

子どもと家族と学校と これまでのタイトル

- ①アルバイト20時間分のカウンセリング料金
- ②高校一年生 ハヤト 不登校
- ③不登校は学校が悪い それとも家族が悪い？
- ④息苦しくて教室に入れない
- ⑤姉13歳と弟3歳のきょうだい
- ⑥カウンセラーが教員の立場で大学生と接すると
- ⑦新一年生は要注意
- ⑧学生さん、初めてこころの病を学ぶ！
- ⑨留年する生徒ゼロのクラス担任
- ⑩私がこんな性格になったのは、母親の育て方が悪かったからだ！
- ⑪どこからが問題？なのか、早期発見、早期対応
- ⑫安心してカウンセリングを受けるには
- ⑬もしもあなたがカウンセリングに行ったなら
- ⑭体調不良と不登校
- ⑮開業カウンセラーの学校訪問
- ⑯きつとよいことがあるよ式子どもへのことばかけ
- ⑰大学生の中退率10%と不登校